

6. 限界突破キャンプ企画委員から

限界突破キャンプのプログラムに関する運営手法やプログラム活用について

前橋市赤城少年自然の家 所長 今泉 真悟 氏

赤城山から榛名山への長距離歩行をする活動を行う際、「楽しそう」と思う反面、「心配・不安」も大きいのではないかと思います。「心配・不安」を極力減らし「仲間と挑戦する楽しさ」を感じてもらうためには、事前の準備やスタッフ間の情報共有が必要になります。

運営マニュアルに、緊急時の連絡体制・対策（避難場所の確保やスタッフ配置など）の詳細が記載されていたのが良かったです。参加者へのセーフティトークをすることも重要なことであり、前橋市赤城少年自然の家でも活用したいと思います。

大切なお子様を無事に保護者のもとへお返しする際に、担当スタッフから保護者様へキャンプ中の様子をお伝えすることは、とても大切で、細心の注意を払わなくてはならない時間だと思います。この時間を設けることも実践したいと思います。

挑戦・協力・感謝

群馬県教育委員会生涯学習課 課長 船引 忠雄 氏

限界突破キャンプは、登山を中心としたプログラムでした。6つの山を登り、総距離約70kmを歩ききるといふ、まさに自分自身の限界にチャレンジした子供たち。

キャンプ中には、彼らの生き生きとした笑顔がたくさん見られました。大自然の中で感動や驚きをたくさん味わえたようです。長い日程ですから大変なこともあったと思いますが、仲間と共に困難を乗り越えていくことは、貴重な体験として心に残ります。最終日の振り返りにも、仲間と協力して生活できた喜びと、楽しく生活できた感謝の気持ちが綴られていました。サブテーマにもあるように、参加した多くの子供たちがこのキャンプを通して新たな自分に出会えたようです。

人や自然と触れ合う体験を通じて、豊かな人間性や社会性、主体性が育まれていきます。まさに子供たちの「生きる力」の育成に寄与したキャンプであったと感じています。

限界突破キャンプを共に過ごして

ぐんま山森自然楽校 代表 剣持 雅信 氏

限界突破キャンプも大詰めを迎えた8月9日の全ルート24kmと、10日の榛名富士登山を子ども達と共に歩きました。仲間との何気ない会話、ゆっくりと移り変わる風景、すれ違う地元の方々とのあいさつ、「歩く」ということで生まれる空間や時間の流れ、「歩く」ことで生まれる「五感」をくすぐる体験、人間にとって最も原始的な移動手段「歩く」、一日の大半を歩いて移動する、今となってはこれも「非日常」の世界。

ゴールの榛名富士山頂に到達した時の日焼けした“笑顔”には、限界を突破した中にどことなく照れくささが混じっていたように感じました。

この夏、確かに7日間を仲間と共に過ごし「喜怒哀楽」が混じった中、最後までやり通したキャンプは一人ひとりのこれからの人生の“肥やし”になったことでしょう。貴重な時間を共有出来たことに感謝いたします。